

一体型矛盾解消のための準備的考察—生き方の論理を求めて—

高原 利生 ()

1. はじめに

現実世界を認識し操作する理論の要件は、認識可能なあらゆるものを扱う対象とすることができ、それに対してあらゆる操作可能な変更の型を適用できること(少なくとも自らの理論の適用範囲を述べるができること)と考えた[TS2006]。その後、TRIZは、変更の種類、型を網羅した形式的方法の集合体と理解することができると分かり[TS2007][TS2008]、従って、オブジェクトを認識できるものととらえさえすれば、技術、制度を扱う全ての操作科学の形式的基礎になり得ると気づいた[TS2009][TS2010]。

TRIZにこれが可能だったのは、TRIZの創始者が、旧ソ連で教育の面で普及していた当時の弁証法を見直す態度を持っていたこと、理想との対比で物事を考えようとした態度による。

いかなる哲学、思想も、さらに方法でさえ、創始者が既存のものを見直す態度から生じた。この見直し続ける態度を学ばなければ、いかなる哲学、思想、方法も、例外なく停滞し墮落させるといえるのは、歴史が示している教訓である。

本来、物事は関連し合い変化を続けていることを教えたのが弁証法ではないか？弁証法もさらに見直し続けるべきものである。

筆者は、オブジェクトの見直し[FIT2004][TS2005]、オブジェクト変更つまり差異解消の形式の検討[TS2006][TS2007][TS2008]、既存の弁証法論理の全面的見直し、特に矛盾の種類、型の網羅[FIT2009][FIT2010][TS2010][FIT2011]を行ってきた。そして今までの、以上の検討内容全てが、見直しを継続する根源的網羅思考といえる形式的考え方によっていることに気づいた[TS2010][FIT2010]。

本来なら、オブジェクト概念の見直し、矛盾概念の見直しに続いて、オブジェクト変更方法の見直しを行うべきだった。矛盾はこの世界の変化、変更の構造を扱う単位であるので、オブジェクト変更の基礎になるべきであったのである。しかし実際には、順序が狂った。矛盾という名前と、自律運動と人間の全ての思考と意図的行為が、矛盾として統一して把握されることになったのはやっと今年2011年であった。

本稿は、2項で、根源的網羅思考の概要、オブジェクトなど基本概念の見直しの概要、3項で、矛盾の型の網羅[FIT2011]の概要を取り出して述べたうえで、4項で、今まで、人類が媒介化と分割を繰り返して生じた問題を解決すべき一体型矛盾の検討を始める。

オブジェクト変更つまり差異解消の形式の検討、矛盾の検討は、すべてTRIZに触発され、TRIZに依拠した検討によることを述べておかなければならないが、本稿の内容は、創造でも技術でもなく(しばらく前からの本シンポジウムでの筆者の発表も)TRIZではない。

2. 根源的網羅思考と基本概念の見直し

2.1 根源的網羅思考

根源的網羅思考は、態度として、謙虚にかつ批判的に、(判断、法則、矛盾、現象など)オブジェクト世界の種類の網羅、粒度と構造の見直しを行い続ける。対象と内容として、基本概念と認識、変更の型を変更し続け網羅し続け、値の可能な変更を極限化し続ける。[FIT2010][TS2010] 根源的網羅思考は、最も根本的な態度、思考形式である。これは、内容と相互作用する。下記の記述にも基本概念が登場する。根源的網羅思考は、事前の検討、その都度の瞬時の視点、態度の決定、実行に当たっての内容判断に三段階に時間分離される。

2.2 基本概念の見直し

行為の実行は、下記の項目の相互作用によって行われるため、理想的、理論的には、下記の項目の同時決定が必要である。とりあえず、基本概念把握、認識変更の内容把握、行為実行の順に行われると近似的にとらえる。下記のうち、普通には、1)は、事前に把握しておくべき内容で、2)には、事前に把握しておくべき枠組みとその都度の実現内容がある。この直列化は、主に、結論を出すために必要な議論、討論に要する言語化のためである。下記のうち實際上、**粒度**が、この直列化の全体を規定した操作もしやすい。粒度は、扱う事物の空間的・時間的範囲と抽象度、密度とは、扱う事実のきめ細かさである [FIT2005][TS2007][TS2008]。

1) 基本概念1: **事実、オブジェクト世界、オブジェクト(物、心(私、私以外)、運動)**、

基本概念21: **価値、価値と相互規定する機能、意味**
 基本概念22: **構造(粒度、内部構造)**

2) 認識、変更の**弁証法**：

世界の構造と変化の認識、変更の内容把握を弁証法論理によって行う。内容は、判断の型の決定と属性の値の決定とからなる、他との差異と変化を扱う判断、推論の形式である。推論には、合成や人の間の推論で

ある議論を含む。

3) 実行

基本概念も根源的網羅思考の対象であるという再帰性がある。下記の三つは、オブジェクトまたは基本的オブジェクト世界を、認識し、変更するために不可欠である。

1. 他との差異がいえる。外部に対し機能をもつ
2. 内部構造を明らかにできる
3. 種類を、秩序だてて網羅できる[Ts2010]

今までに見直しを行った基本概念には、オブジェクト、領域、矛盾がある。今後、見直しの必要な基本概念には、所有、帰属がある。

オブジェクトとは認識できるものであり、存在；システムオブジェクト、と相互作用(=運動)：プロセスオブジェクト、の二つがある。さらに種類という面から、存在を、ものと心(自分の心と、他人の心のうち認識可能な物理的実体に担われたもの)に分ける。オブジェクト世界は、オブジェクトと属性の複合体で、最小単位はオブジェクト、または属性である。変えられるものは認識できるものの中にある。[FIT2004][TS2008]

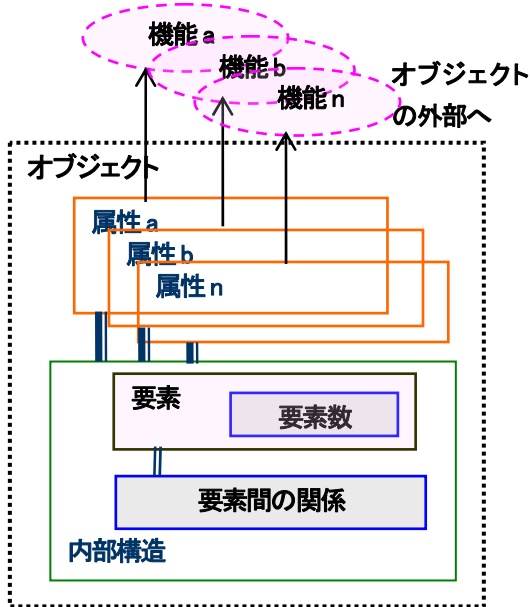


図1 オブジェクトの構造 [TS2008]

オブジェクトは、粒度によって全体から切り取られ、属性を持つ。属性は、内部構造と(狭義の)属性を持ち、値を持つ。(狭義の)属性は外部に対しては機能となり、変化しやすい状態としにくい(最狭義の)属性からなる [TS2007][TS2008]。

運動は時間軸上では過程であり、作用の結果変化をもたらす。運動は、ものの位置的運動に限らず、機械的、化学的、有機的、生物的運動も社会の制度的運動も思考という観念の運動も含む全ての運動である。

本来の同時決定は、1) 基本概念 2) 弁証法 3) 実行に

ついて行われるが、實際上、粒度が全体を規定するととらえて思考をこの順に直列化する。

2.3 判断の見直し

状況から比較的独立した体系的知識について、事前に、オブジェクト、属性、オブジェクトの変化やオブジェクト間関連についての判断、法則、領域の型の網羅と位置づけを行い、判断、法則、型の生成、修正をし続ける。これは既存の判断や法則の変更、成立条件(適用領域の粒度、密度)の変更を含み、適用領域の網羅を含む。

1. 判断、法則の主語、述語、インプット、アウトプットのいずれもオブジェクト世界であり、判断、法則はそれらの関係を表現する。

判断の要素は次のとおりである。

内容：オブジェクトまたは属性の存在、存在の運動+法則の内容、形式：主部+述部

法則は次のとおりである。

内容：一つのオブジェクトの、一属性の変化、属性間の(運動を含む)関係、(その結果の)変化、複数のオブジェクト間の、(運動を含む)関係、(その結果の)変化、形式：インプット+アウトプット

2. 判断の属性と粒度の変更

それぞれの粒度を変化させる。

1) 判断の主部と述部の構造そのまま変更

判断の主部、述部の1) 属性を変化させる、2) 属性を削除する(より大きな粒度の主部、述部に置き換える)、3) 属性を追加する(より小さな粒度の主部、述部に置き換える:この例は多い。正しさの説明に例しかないものは殆どこうする必要があるので)

2) 判断の主部と述部の構造を変更

判断の主部、述部について、同じ述部が成立する主部を網羅し新しい主部とする(より大きな粒度の主部に置き換える)。こうできると主部と述部は、同じ内容となり、言い換えとなる場合がある。そうして主部と述部を入れ替えると定義になる。

例: 存在は他の存在と相互作用するという命題(カント、マルクス)から存在の定義を作る、例: 商品は属性の集合体だという把握を一般化し、商品を存在またはオブジェクトの定義に拡張する。

3) 法則のインプット、アウトプットの要素、条件の要素を網羅し、それぞれと全体の粒度を極限まで変化、削除、生成する。例: 質量転化の法則の拡張[FIT2009]。

3. その都度、決定的なのは、実質的に価値と事実の粒度である。実質的に粒度であるという意味は、必要な粒度を瞬時に仮の形にせよ設定可能であることである。しかも日常、我々はいつも粒度を無意識に設定して生きて

いる。議論、討論は、価値と事実を扱う意識的に粒度を明確にしたうえで明示して行い、実行後のその検証も必要である。

4. 「今」の瞬時の視点、態度を決めることが重要である[FTT2010][TS2010]。

状況に依存したその都度のオブジェクト変更の型、値の極限的变化見直しについては、[TS2010]参照。

3. 矛盾概念の見直し

3.1 矛盾

世界の認識、変更の内容把握を弁証法論理という形式によって行う。世界の認識、変更の内容把握において、弁証法[TRSW]は全てのオブジェクトが双方向に関連しあい運動し変化しているのとらえる論理であり思想である。

矛盾は、**運動をもたらす相互作用**である。つまり、矛盾は、内部的には、二項の対立項とその直接の相互関係であり、対外的には、運動という機能を持つ。矛盾は、世界の構造と変化を近似するための単位である。近似するための単位であるという意味は、第一に、全体の相互作用、歴史性の一要素であり、第二に、相互作用を、矛盾と条件(的相互作用)と無視できるものに分けて、そのうち矛盾しか扱わないことである。

矛盾は、先に述べた基本概念の三つの要件を満たす。矛盾のとらえ方については、1. 矛盾の型の分類根拠、矛盾の型の網羅、つまり矛盾の内部構造の型の分類根拠、内部構造の型の網羅、2. 相互作用が、価値の一致を前提としているか対立を前提としているか、3. 矛盾の解の型の分類根拠、解の型の網羅、4. 領域の型の分類根拠、領域の型の網羅、5. 矛盾の法則の網羅ができれば全体像が定まる。(2.3.4.5については本稿では触れない)

矛盾が重要なのは、世界の変更が重要であるからで、矛盾はこの世界の変化、変更の構造を扱う単位であるからである。したがって矛盾の種類の網羅が重要になる。

3.2 矛盾の内部構造の分類根拠[FTT2011]

1) 全運動の内容による分類根拠

矛盾の内部構造の型の分類の根拠の要件は、内容的に客観的事実の運動と人間の行動、思考の全運動を網羅できることである。

全運動網羅のための手段の第一は、理想的には歴史の全てを総括することである。このための第一の視点は、次のようなものである。もともと、低次だが一体であったものが、間接化、媒介物の分離によって高次化したのが人の第一の歴史だった。一体が、分離のために解体して生じた疎外を、対象化、分割で得た高次化の利点を保

持したままで再び一体化によって解消しようとするのがまだ本格化しない人間の第二の歴史である。

第二の視点は、この歴史に介入して問題を解決してきた、TRIZの『仲介原理』『分割原理』『排除(と再生)原理』『併合原理』[TRIZ]に代表される解の行為を運動に含まないといけないということである。

2) オブジェクトの形式による分類根拠

手段の第二は、全運動の形式を網羅することである。

これにはいくつかの視点がある。第一は、矛盾の要素である対立項、相互関係の可能性を、認識できる全てのオブジェクト種類；もの、観念、運動に開放することである。これは、矛盾を、技術領域、制度領域、個人の思考領域のどこでも運動できるようにするであろう。

第二の視点は、その矛盾の様々な粒度を網羅することである。この矛盾のあらゆる空間、時間、抽象度での表現を可能とする。オブジェクトの用語で言うと、蓄積された結果というシステムオブジェクトと、蓄積しつつあるプロセスオブジェクトの双方の表現を網羅する。

第三の視点は、その矛盾の様々な密度を網羅することである。同じ矛盾について、一属性の二値、一オブジェクトの二属性、二オブジェクトの二属性の矛盾がある[TS2008]。例えば、機能と構造は、一オブジェクトの二属性である。同時に、機能と構造は、その変化という同一性と差異性の一属性の二値の矛盾を持つ。例えば、戦っている二つの国という対立項の矛盾は、二オブジェクト、二属性についての矛盾である。この矛盾は同時に、機能と構造という一オブジェクト二属性の矛盾を持つ。つまりその戦いは外部および内部のオブジェクト対立項に対してある機能を持ちその機能はある構造を持っている。

3.3 全運動の内容による矛盾の内部構造の分類の概要[FTT2011]

1) 自律矛盾

自律運動は、通常の矛盾、自律矛盾が起こす運動であり、対立項、相互関係とも自律矛盾の要素である。自律矛盾と解が分離しておらず、解が新しい矛盾を続けていく閉じたサイクルを作っているように見なせる近似である。閉じたサイクルなので、矛盾の構成要素と運動が、技術領域、制度領域、個人の思考領域のいずれかに限られ、他の領域とのやり取りがない。

自律矛盾はものの運動に限定されない。技術領域についてのものの機械的、化学的、有機的、生物的運動、制度領域の共同観念の運動、個人の思考運動からなる全ての運動が含まれる。

2) 行為または思考を起動する矛盾:「物理的矛盾」「技術的矛盾」と一体(型)矛盾

今まで矛盾が自律運動であることは、暗黙裡に前提とされており、自律運動でなく人の介入がある矛盾などあり得ないように思われてきた。従来、目的を実現するのは、因果関係を利用するしかないと思われてきた。因果関係利用に際して、矛盾についての知見を利用すると考えてきたのであった[TS2008]。しかし、作る矛盾、行為、思考を起動する矛盾は、通常の人による介入を含んだ拡張であり人が作る矛盾である。

自律矛盾が運動を起こし、それが新しい矛盾を続けていく閉じたサイクルを作っているように見させるのに対し、行為、思考を起動する矛盾は、客観または主観の対立項と意図的相互作用が形成する矛盾である。このような拡張では、観念の上で、相互作用が、矛盾を形成し、観念上で、矛盾解消のための解が得られ、解が実行されて実運動になる。技術領域についてのものの運動または制度領域の共同観念の運動と、個人の思考運動が行き来する。

「物理的矛盾」「技術的矛盾」(ともに良い言葉ではないがTRIZの用語を流用する)と一体型矛盾がある。

「物理的矛盾」は、対立項が一属性の二値である。この二値間の差異を認識し**差異解消**を目指す意図的努力が相互作用であり、矛盾が形成され、解が行動または思考を起動する。差異が解消されれば矛盾は解消する。

「技術的矛盾」は、対立項が二属性である。この二属性の両立または共有を目指す意図的努力が相互作用であり、矛盾が形成され、解が行動または思考を起動する。**両立**または**共有**は、より良き両立または共有をもとめて継続する。

両立の中から、物々交換のように、お互いに利益になる共同観念の**共有**が成立した。意図的両立の中から、長い時間粒度の中で、意図は背後に消え、あるいは生物の進化の歴史のように偶然が背後に消えて、機能と構造のような矛盾が成立した。注意すべきは、機能と構造の矛盾には二種あり、生物の進化の歴史における偶然や意図が背後に消えた機能と構造は、技術的矛盾でないが、普通の意図が主役を演じ、機能を良くしようとする機能と構造という矛盾は、「技術的矛盾」であることである。

ここでの「物理的矛盾」「技術的矛盾」は、TRIZ [TRIZ] [NKGW] が矛盾概念を拡張して「物理的矛盾」「技術的矛盾」を導入したものの一般化になっている。

一体型矛盾は、「技術的矛盾」の一種として扱うことも可能である。もともと一つのものだったものが、分離して客観と態度、または二つの態度として存在していたものが、人の、より広い粒度に立った一体化の意識的努力によって再び一体を目指す矛盾である。この点が、「技術的矛盾」と異なるため、ここでは「技術的矛盾」からこの特

性を持つものは除外している。

以上のように、目的の実現を行う型を網羅しようとした結果、矛盾という名前で、自律運動と人間の全ての思考と意図的行為が、矛盾として統一して把握されることになった。

3) 相互依存する二つの異なった認識

本質と現象、一般と特殊などは、従来、矛盾として扱われている[TRSW]。しかしこれらは相互依存する二つの異なった認識であり、矛盾ではない。これらを差異ととらえ、例えば本質や一般を追求していく思考運動を展開する場合に限り、ともに観念空間内にある対立項も相互作用も、その結果の運動も、矛盾の要素として扱うことができ、全体を矛盾ととらえることが可能である。

3.4 オブジェクトの形式による矛盾の内部構造の分類 [FIT2011]

オブジェクトの型による分類を述べる。

a) 一オブジェクト一属性の二値の矛盾

一オブジェクト一属性の二値の矛盾をまとめると、次のようになる。これらはすべて差異解消である。

10) 実運動の変化そのもの：一属性の二値が同一性と差異性の矛盾

これは、実運動を変化そのものだけを表す粒度でとらえた矛盾である。TRIZにならい、いい用語ではないが物理的矛盾1, PC1という。

例：ある状態にあり、ない：一般の位置的、機械的、化学的、有機的、生命的、社会的運動

20) 一属性の二値の対立項が作る「物理的矛盾」

201) 行為、思考を起動する矛盾において、現実のある状態a と、a と全く異なる目的のb を違った時間取る場合：「物理的矛盾」3, PC3

目的は観念の中にしかない。直接、現実を目的に近づける意識的努力をすることによって運動、矛盾ができる。問題解決、新機能生成、理想化を扱う差異概念で、全ての**単純な**目的は網羅的に表現されている[TS2006]。例えば、今の高いまたは低い室温と理想の室温の単なる差異のように、通常は、矛盾ととらえられないこの差異を客観的対立項とし、その解消を行おうとする意図的な運動を相互作用ととらえる。こうして差異と差異解消が、客観空間と観念空間を合わせた空間内に拡張されて、対立項と相互作用を形成し矛盾となる。

次の目的についての視点を確定する。

- 1) 新しい機能を作ること
- 2) 問題解決：既存のシステムの不具合解決
- 3) 理想化：既存のシステムの機能をもっと良くすること、または現在の機能をより少ない資源、負荷で実現す

る改良 [TS2006] 全ての問題、差異を解消する単純な目的はこのいずれによっても定式化できる[TS2010]。形式上、三つの差異の要素は、一オブジェクト一属性の値がない状態（解は、追加すること）、一オブジェクト一属性二値の矛盾、一オブジェクト一属性の値の過剰（解は、削除すること）に分解されるととらえることができる [FT2007][TS2008]。この場合、三者は、一属性の二値、目的と現実という対立項を、「物理的矛盾」3, PC3 とすることととらえる。単純なオブジェクトの操作と変換方法の型(変換原理U, P, M, D, 操作方法R [TS2007] [TS2009])により単純な解が得られる。

本質と現象、一般と特殊などは、相互依存する二つの認識であり、矛盾ではない。しかし、人がこれを差異ととらえ、例えば本質や一般を粒度や密度の異なる目的として追求していく運動を展開する場合、対立項も相互作用も、その結果の運動も、ともに観念空間内にある矛盾ととらえることが可能である。

202) 行為、思考を起動する矛盾において、一属性の二値が、ある状態a と、a と全く異なるb を(一見)同時に取る場合:従来のTRIZの「物理的矛盾」である「物理的矛盾」2, PC2

人の意識的把握によって分離する努力をする。

もともとのTRIZの、ある属性に関して、例えば固く同時にやわらかくというように相反した要求が同時にある「物理的矛盾」PCは、この「物理的矛盾」2, PC 2に相当し、属性(値)の分離原理によって解が得られることが知られている [TRIZ] [NKGW] [LB]。

220) 一属性の二値の対立項が作る一体型矛盾

あるかどうかわからない。

b) 一または二オブジェクトの二属性の矛盾

一オブジェクトまたは二オブジェクトの二属性の矛盾をまとめると、次のようになる。これらはすべて、両立または共有である。共有は両立の特殊な場合である。両立または共有は、より良き両立または共有をもとめて継続し得る。(なお、高原の考え方の内容に、「差異解消の理論」という名前を付けていただいている[NKGW]。正確には「差異解消と両立の理論」と呼ぶべきかもしれない)

11) 実運動の二属性の両立で対立項ができるという変化の客観的構造を表現する矛盾

両立する対立項が変化しつつ運動が続く。

111) 一オブジェクトの二属性が対立項

作用による変化をもたらす内容と形式がある。この典型的なものに機能と構造がある。

112) 二オブジェクトの二属性が対立項

一般的な運動の構造である。

例：戦っている二つの集団

21) 一または二オブジェクトの二属性の対立項が作る「技術的矛盾」, TC

211) 201)項や202)項の解、単純な解が副作用を起こす場合、副作用を事後に人の意識的把握によって解消する努力をする「技術的矛盾」1, TC1

もともとのTRIZの「技術的矛盾」[TRIZ]:「ある面を改良しようとする、別の面が悪化する」というのは、矛盾の表現にそぐわないので、「ある面を改良しようとする、別の面が悪化する、それを解決するある面の改良と別の面の悪化防止の両立」と言い換える。[TS2006] もとの作用が直接起こす副作用と、もとの作用が直接起こさない予期せぬ副作用がある。

この型を以下に網羅する。[TS2010]

2111) オブジェクトの削除があっても両立を続ける TC11

片項または相互作用がなくなることへの対処をする。

2112) 二属性の両立の努力をする TC12

ある属性の変更が他の属性を悪化させる対処をする。

212) 二属性という対立項を、事前に人の意識的把握によって両立または共有の努力をする「技術的矛盾」2, TC2

この型を以下に網羅する。

2121) あるオブジェクトがなくても両立を続けるシステム生成、維持 TC21

2122) 二属性の両立または共有の努力をする TC22

21221) 一つまたは二つのオブジェクトが、相互作用のある二つの属性を両立させるTC221

この場合、別々のオブジェクトが対立項、両立する属性の相互作用が矛盾を形成する。相互作用の間、両立の度合いが変わっていく。

21222) その中で特に相互作用のある別々のオブジェクトが、同じ属性を共有するTC222

同じ属性をもつ両立が**共有**である。制度の共同観念のもとになった物々交換の成立[TS2010]は、二オブジェクト間の共同観念の共有、同一観念化というTC222の解決であった。この場合、物々交換の主体が対立項であり、物々交換がお互いに利益になる共同観念の共有が相互作用である。相互作用の間、共有の度合いが変わっていく。

22) 一体型矛盾

一体型矛盾は、対立項も相互作用も観念が作る矛盾である。個々の対立項のそれぞれは、もともと一つのものだったものが、分離して客観と態度、または二つの態度として存在していたものである。これが、人の、より広い粒度に立った一体化の意識的努力によって再び一体を目指す矛盾である。

一体型矛盾は、価値の同一性を前提にして、より大きな何のための一体を目指すか、何と何が一体の対立項で、何の属性についての対立であるかということが決まると内容が決まる、対立項それぞれがお互いをプラスにしていく矛盾である。

一体化の矛盾の型は、分離の型に対応する。

221) 一オブジェクトまたは二オブジェクトの二属性の対立項が作る一体型矛盾

2211) 基本矛盾:対象化と一体化

種の生産の一体化は行えない。無性生殖から有性生殖への進化による性の分離は、個人の意思を超えた歴史過程であるからである。

個の生活の生産つまり労働と消費の中で、対象化、分離によって個と対象、個と他、個と共同体の高度化が進んできた。この再一体化が一体型矛盾の基本である。

この基本に従属する一体化がある。下記に例と示す。

2212) 分離された二つの行動、思考の一体化

発展は分離によって得られたのであった。よりよい分離のための部分的一体化はしばしば行われる。

2213) 行動と思考の一体化

22131) 行動と思考の一体化

認識と行動、目的と手段、感情と論理

22132) 二つの思考の一体化

視点と態度、分析と総合、普及と深化、考えることと学ぶこと、受容と表現、集中と拡散

22133) 二つの態度の一体化

謙虚さと批判、謙虚さと自信、ほめることと批判、信じることと事後の批判、自由と愛、

2214) 固定的なものと運動の一体化

システムと運用、手順と運用、体系と運動、哲学と方法

2215) 歴史と論理の一体化

3.5 矛盾の内部構造の型網羅がもたらすもの

全ての運動と変化の事象が、矛盾として統一して把握されることになった。矛盾の粒度、密度を選定できる任意性と様々に目的をとらえる視点の任意性がある。この操作により、前項に述べた内部構造の型の網羅[FIT2011]から矛盾が特定できる。

これが今の視点、態度を決めることそのものであった。

矛盾を要素として、認識の合成ができる。第6回TRIZ シンポジウムで述べたオブジェクト変更(差異解消)の実現方法が精密化される。これは、変更のための合成である[ITS2010 3.3項]。これは、単純なPC3とそれ以外の複雑な矛盾の組み合わせからなる。

4. 一体型矛盾

4.1 現実の歴史

歴史を概括し、その中から現実の究極の問題を探る。

もともとは分離がなく一体であった。生命増殖は単性生殖によって行われてきたし、今でもほとんどの生命では、労働と消費は分離していない。次に、生命である人間の基本矛盾として、種の継続のための個の生産において、有性生殖で行われる進化が生じて男と女が分離し、個の維持としての生活の生産が始まり労働と消費が分離する。([MARX] p.147)

さらに、生活の生産について、道具と共同観念による間接化によって技術と制度が分離する。技術は、個と対象の関係である。制度は、個と共同体の関係である。それぞれがさらに媒介化と分割を続け人類の歴史ができる[TJ2003Jun]。以後、労働と消費が、技術と制度の二面で進むのが人間の歴史となる。

全ての自律運動の中で、生き残りに寄与する、つまりプラスの価値を持った矛盾という運動はどういう運動かは問題になる。それは、プラスの価値を持った属性の増加、マイナスの価値を持った属性の減少をもたらす運動である。これを可能にするのは、おそらく、平均的な人間の能力を前提にした場合、道具と共同観念による媒介化に始まり、オブジェクト分割と統合の繰り返しによって、進展してきた。これによって高度化が進んできたのであった。発展は、全てあるいは殆ど分離による。

大きな統合化、一体化が必要であるがまだ解決されていない。第一に、個と対象との関係において、疎外や生きがい喪失、第二に、個と共同体との関係において、宗教や国家、民族との偽の一体化意識による対立がある。

前者は、主として労働である日常の生きる行動、オブジェクト、自分の三つ、要するに生きるという運動が、全構成要素の属性をプラスにしていない。つまり、主として労働である日常の生きる行動が、オブジェクトと自分を一体にしておらず、生きる運動が関係するオブジェクトの属性をプラスにしていない。間接化と分業と「疎外」により三重に失われた一体性の回復が必要である。個と対象との関係は、技術問題であるので、制度に影響されるものの、本質的に、制度の形態に限定されない課題である。この点は誤解されている。

後者の課題は、安直にこの分離から逃れるために、疑似帰属意識をもたらしている問題である。自共同体以外の国家、民族、宗教共同体への敵視と共存する帰属意識は、それなりに時間と労力をかけて意図的に作られたにせものである。

しかもこれは、もう一つの疑似一体感のもとである疑

似所有意識の問題を決して解決しようとしなさい。

今は、やっと対象的生き方とともに一体化を意図的に自由に回復することのできる、人の第二の歴史段階の入り口に至った。

4.2 理想像定式化

理想的には、一事を解くことは全体を解くことでなければならぬ空間軸の全体的理想化、瞬時に全体を解かねばならないという時間軸の全的理想化という究極の理想像(SRTR)を考える。これからから、一体化の必要性が出てくるはずである。この中から、一体化の内容を抽出しなければならぬがそうすればよいのである。

1. 価値観：私と他者が、理想の価値共有を求め続ける。

価値は属性の一種である。価値の共有の意味を考える。第一に、価値の共有が何に担われるかという、自分と他人、自分の行為と他人の行為、さらには対象に、である。つまり、価値の人間間の一致、行為間の一致、対象間の一致である。第二に、共有される価値という内容、意味は、当然ながら、上記の担うものの中で、全属性の全ての値が一致することを意味しない。基本属性(生の価値、他へ敬意)の同一性の共有の上の多様性が、共有ということである。

2. 外部に対する機能：全員が、全対象、全共同体の価値実現のための行為をし続ける。全対象、全共同体がよくなり続ける[MARX]。変更が与える副作用をも考慮した結果の確認を行い、必要な修正を行い続ける。

技術、制度、主観の同時変革が必要である[MARX]。一事が万事、一時が万事なのである。究極の理想を実現するのは全ての人の個々の全ての行為である。

主観的意図とそれが実現できない客観との隙間を埋めねばならない。この隙間を埋めるために必須なのは、変化という視点で全体を目指すことである。変化という視点で全体を目指すことの持続(今のままの変更または変更の仕方の変化の持続)で全体性の代わりにするしかない。矛盾という単位も、変化の構造を表しているからこそ有効なのであった。

3. 主体内部に対する機能：その価値実現のために行う認識を含む行為が、私と他者の能力をよりよく発揮したものになりつつある。私と他者によりよく結実しつつある[MARX]。

上と同様に、変化、変更の継続が必要である。

4. ところ：私と他者が、現実、私と他者の能力、行われつつある行為が、よくなりつつあると認識し、よりよく認識しつつある。私と他者、共同体が相互依存という意味でより一体化しつつあることを認識し、よりよく認識しつつある。全員の、目的、手段の対応の認識が必要

である。私と他者は、お互いの行為を全て知っている。つまり、認識の面での主観と客観の一致は、私の変更行為が私以外のものの変更を含む場合は、その変更のための認識と変更の内容と意味を私が理解すること、その変更のための認識と変更の内容と意味の全体の中の位置を理解すること、逆も同じであることである。

一体感とは、とりあえず、静的な帰属感、帰属意識(自分が何かに属している、包まれている意識)と所有感、所有意識である。しかし、所有感、所属意識には、他に何かいい名前があるであろう、というより、所有感、所属意識に代わる新しい意識が必要である。マルクスの「所有」は、ヘーゲルの法制度上の「所有」観念にとらわれて狭く解釈され過ぎる。対象に対する「ある対象がわれわれの対象である」という意識が開く「すべての肉体的および精神的な感覚」、そして、この逆方向の、本来、全ての対象から見た我々、私の、我々、私にとっての意識が必要で、それが、現在欠けている。神沢利子作「くまの子ウーフ」(ポプラ社)の中の「ちょうちよだけになぜなくの」という短編で、ウーフは「ぼくのちょうちよだ」と「所有」意識を持った対象である死んだちょうちよに対してだけ新しい悲しみの感覚が生じている

この所有意識という名前に代わる、私、他、オブジェクトの対等の関係を表す動的な新しい意識が必要である。これも根源的網羅思考の基本概念見直しの一部である。帰属意識との統合も必要かもしれない。

1. が、全体の前提である。2. が外部に対する機能であるのに対し、3. は、主体内部に対する機能である。2. は、主体の行為+外部に対する機能を、価値の同一性という条件で述べ、3. は、主体の行為+主体の内部に対する機能を、内部に対する機能の結果と外部に対する機能の結果の同一性という条件で述べている。4. は、主体の主観である。

4.3 結論と課題

この理想実現の基本は、両立または共有の努力をする「技術的矛盾」2と一体型矛盾の双方を同時に解くことである。「技術的矛盾」2の解法は別として、一体型矛盾の検討もさらに行う必要がある。

一般の一体型矛盾と、ここでの個と対象、個と他者、個と共同体の一体化という基本的な一体化矛盾がある。一般の一体型矛盾の例として、謙虚であり同時に批判的であることがある。どちらも今、欠けており、一体型矛盾の特徴は、その解決の中で、両方がよくなることである。基本的な一体型矛盾だけでなく、一般の一体型矛盾の解決も急を要しているが、本稿では触れることができなかった。

さらに、内部の個々の項の実現に必要な要件、暗黙裏に前提としているが実は実現の難しい条件、意味を深める必要のあるもの、実現の制約条件がある。

全ての人と全ての行為の、オブジェクトを改善する視点と、個と対象、個と他者、個と共同体の一体化の視点と、変化の視点での、日常の努力の先に、究極の理想があることは分かった。こうやって見てくると、膨大な解決必要内容があるものの、解決不可能ではないことが分かる。分割の高度化の中に一体化を進める面もあるのだ。

5. おわりに

全体の理論は、形式的には、根源的網羅思考、内容的には、差異解消(と両立の)理論である。根源的網羅思考は、オブジェクト世界の粒度と構造を見直し続け、種類の網羅を行いつける思考である。これは、あらゆる領域のあらゆる態度と思考、思想と科学に必要で有用である。

根源的網羅思考により、矛盾という名前で、自律運動と人間の全ての思考と意図的行為という全ての運動と変化の事象が、矛盾として統一して把握されることになった。矛盾を把握することは「今」の瞬時の視点、態度を決めることであった。矛盾の型の網羅は、認識、変更の合成にも有用であった。

個々の、例えば、謙虚さと批判の矛盾は検討できなかったが、一体型矛盾の検討の準備を行うことができた。我々の日常の個々の行為が、究極の理想への道であった。

謝辞

この数年来、中川徹教授からの励まし、コメントが支えであった。晴子と結菜からも教えられることが多かった。厚くお礼を申し上げる。

参考文献

- [TJ2003Jun] Takahara Toshio: “Application Area of Thinking Tool or Problem Solving Tool”, The TRIZ journal, Jun.2003.
- [FIT2004] 高原利生, “オブジェクト再考”, FIT2004,2004.高原利生論文集、『差異解消の理論』(2003-2007)
<http://www.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/ijpapers/2008Papers/TakaharaPapers2003-2007/TakaharaBiblio080323.htm>
- [FIT2005] 高原利生, “オブジェクト再考3－視点と粒度－”, FIT2005.高原利生論文集『差異解消の理論』(2003-2007) 同上ホームページ
- [FIT2009] 高原利生, “弁証法論理の粒度,密度依存性”, FIT2009,2009.
- [FIT2010] 高原利生, “TRIZ と生き方における対立物の構造と根源的網羅思考”, FIT2010,2010.

[FIT2011] 高原利生, “弁証法論理再構築”, FIT2011,2011.

[TS2005] 高原利生, “オブジェクトの再把握とそのTRIZ,USIT,ASITへの適用”, 第一回TRIZシンポジウム,2005.高原利生論文集、『差異解消の理論』(2003-2007) 同上ホームページ

[TS2006] 高原利生, “機能とプロセスオブジェクト概念を基礎にした差異解消方法—またはBall氏の“階層化TRIZアルゴリズム”についてのコメント—”, 第二回TRIZシンポジウム,2006.高原利生論文集、『差異解消の理論』(2003-2007) 同上ホームページ

[TS2007] 高原利生, “機能とプロセスオブジェクト概念を中心にした差異解消方法 その2”, 第三回TRIZシンポジウム,2007.高原利生論文集、『差異解消の理論』(2003-2007) 同上ホームページ

[TS2008] 高原利生, “オブジェクト変化の型から見えるTRIZの全体像—機能とプロセスオブジェクト概念を基礎にした差異解消方法その3—”, 第四回TRIZシンポジウム,2008.

<http://www.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/ijpapers/2009Papers/TakaharaTRIZSymp2008/Takahara-TRIZSymp2008-090708.htm>

[TS2009] 高原利生, “TRIZという生き方?”, 第五回TRIZシンポジウム, 2009.09. http://www.geocities.jp/takahara_t_ieice/

[TS2010] 高原利生, “TRIZの理想—TRIZという生き方?その2”, 第六回TRIZシンポジウム, 2010.09.

<http://www.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/eTRIZ/eforum/e2010Forum/eTRIZSymp2010Rep/eTRIZSymp2010TNRRepH.html#Takahara>

[TKHR] 高原利生, “唯物論,事実主義宣言ノード”, “価値について”, “弁証法について”, “同一性について”,

http://www.geocities.jp/takahara_t_ieice/

[TRIZJ] <http://www.triz-journal.com/>

[NKGW] 中川徹, TRIZ ホームページ,

<http://www.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/>

[LB] Lary Ball: ‘Hierarchical TRIZ Algorithms’, The TRIZ journal, 2005.05-2006. 日本語訳, “階層化TRIZアルゴリズム”, 高原, 中川 訳, 2006-2007.

<http://www.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/lectures/2006Lec/BallHTA0601/BallHTA-0.htm>

[TRSW] 寺沢恒信, “弁証法的論理学試論”, 大月書店, 1957.

[MARX] マルクス, “経済学・哲学手稿”, 藤野涉訳, 国民文庫, pp.98-157,大月書店, 原著1844.

[SRTR] サルトル, “方法の問題”, 平井啓之訳, 人文書院, 原著1960.